巻頭言　　鍵は料理ー女性のエンパワーメントと入会・山村

寺尾　仁（新潟大学准教授）

女性の地位が世界中で大きな課題となっている。昨年10月にドニ・ムクウェゲ医師とナディア・ムラドさんに対して、紛争の下で起きている性暴力と闘っていることを理由にノーベル平和賞が授与されたことを頂点に、昨年６月にはサウジアラビアで女性への自動車運転が解禁され、一昨年からはアメリカを中心にセクシャル・ハラスメントに抗議する#Metoo運動が盛んに展開している。日本でも、大手企業や省庁におけるセクシャル・ハラスメントが大きな批判を浴びたことは改めて言うまでもない。山村においても女性の地位は大きな課題である。昨年の巻頭言で塩谷弘康さんが触れている「地方消滅論」は、「20歳～39歳の女性」の人口動向を基準としている。女性に限らず、ある人々が望んで住む社会とは、その人たちの活動が正当に評価され、発言が尊重される社会である。山村にあるさまざまな要素、すなわち入会林などの森林、集落を貫く川、廃校になった小学校の建物、濃密な人間関係などを、女性の地位の改善に役立てることが、山村の大きな課題である。

課題解決の一つの鍵は料理である。活気ある山村では地元にある資源を生かした小規模経済の伸びが著しい。「里山資本主義」などと称されている現象である。その重要な要素は料理である。具体例を挙げると、中山間地域の地域振興を目的に３年ごとに新潟県内で開催されている「大地の芸術祭」では、2006年の第３回に廃屋の民家を大改修してその中で陶芸作家の作品、大きな物ではかまど、浴槽から小さなものでは皿、湯呑みまでを「うぶすなの家」として展示した。ここで料理を担当したのは地元集落の女性たちである。「東下組おんなしょの会」を組織して当番で料理人を決め、地元の田畑や森で取れる野菜、米、山菜、肉などを使ってふだん家で作っている家庭料理を提供したところ、客からはたいへん好評を得た。女性の作る料理を家族は無口でなかなか褒めることがなかったが、訪問者が高く評価することで女性たちは張り切った。その後「東下組おんなしょの会」の料理人たちは料理の腕を上げたし、また外からの助言も水準がどんどん上がった。2018年の第７回芸術祭には、東京にあるミシュラン・ガイド三ツ星レストランのシェフとの協働のメニューを作るまでになった。

女性が力量を上げたのは料理の面だけではない。人口減少の中で、市が保育所や小学校が統合する際には検討に加わり、通学バスの運行を求め、さらにそのバスを誰でも乗車できる市バスにした。「うぶすなの家」「東下組おんなしょの会」の代表を務める水落静子さんは「作品や作家さん、北川フラムさんやこへびさん（首都圏の学生を中心とした運営ボランティアー寺尾注）と会わなければ、こんなにいろいろなことを考えなかったし、反論の言葉も出ませんでした」と言う。彼女はその後、2017年の市会議員選挙に立候補し27人中４位の1724票を得て当選する。料理に対する外からの訪問者の評価が、集落の濃密な人間関係を生かしつつ女性のエンパワーメントに大きく寄与した。その食材を供給している「森林」も誇らしいと思っているだろう。